

担当者として



モデレーター
上杉和央
文学部准教授

魅力の源泉が「人」にあること

人材育成プログラムというだけあって、本事業のメインは「人」です。ただ、それを「場づくり」の「Labo」でおこなうことが特徴となっています。つまり、単に個人の成長に焦点を当てるのではなく、その「場」で起こる化学反応というのが大事にされるわけです。一般にLaboでの実験は、入念に準備し、結果の予想を立てつつおこなうのがセオリーです。今回も、多くの方々から協力を仰ぎつつ、準備を重ねて当日に臨みました。ただ、南山城村というLaboでは、準備段階での予想をはるかに超える化学反応が起きました。それは参加者それぞれのポテンシャルに加え、南山城村の持つ魅力が引き起こしたのではないのでしょうか。そして、その魅力の源泉が「人」にあることを大いに学ぶことができました。そうした魅力は、本来どの地域にも内在しているものです。参加した皆さんの南山城村での経験が、自分の地域の魅力を再発見し、磨いていこうとするきっかけへとなればうれしく思います。



撮影・記録
岩崎雅史
生命環境学部准教授

生き生きとした表情

メインはビデオグラファーとしての参加でしたので、私が最も印象に残ったのは被写体である参加者1人1人の生き生きとした表情。“楽しい！”がファインダー越しに伝わってきて、撮影している私までもとても楽しい気持ちになりました。また、断片的ですが色々なお話も聞くことができ、とても充実した2日間となりました。南山城村の話題は特産品に関する一種のサプライチェーン問題。地域の活性化という制約条件付き最適化問題と見れば数学とも遠くない？ 私に限らず地域研究が直接的なご専門でもない方でも何か得られるものがあるかも!? というのが理系研究者としての感想です。場づくりLaboの心地よい雰囲気は今後公開予定のYouTube動画を通じてお伝えできれどと考えています。



モデレーター
鈴木暁子
コーディネーター

「制度と生活の世界をつなぐ」

地域を歩きながら、キーパーソンから話を聞き、旬の食材を堪能する。五感で感じたことを言葉にして、話し合いを通じて「我がごと」にして落とし込む。そのような「学び舎」をつくらう！とセンターで構想して2年。多くの方にご協力いただき、無事に開催することができました。参加した自治体職員からは、「制度をつくれれば何とかなると思っていたけれど、地域づくりに関わる人の熱意に触れて、それだけでは足りないことに気づいた」との声が聞かれました。コロナ禍も重なり、地域に向かい住民から思いを聞く機会が減るなかで、地域づくりの原動力となる情熱がどのように生まれ、人に伝播し、価値創造につながるダイナミズムが形成されていくだろうか。そのような場をデザインするために当センターや大学は何が求められるだろうか。みなさんが触発される瞬間を拝見しながら、改めて考える機会となりました。ご協力いただいたみなさまに改めて感謝します。

4

協力 (南山城村役場、株式会社南山城、ポートランド州立大学公共サービス・実践センター)

南山城村のハブとなっている「道の駅みなみやましろ村」に関わるキーパーソンの方々、南山城村役場の方々、そして地域の方々。事前調査から当日まで大変お世話になりました。ありがとうございました。



メンター
森本健次さん
(株)南山城村代表取締役



キーパーソン
児岩知也さん
むらびとらべる 代表



キーパーソン
中窪良太郎さん
中窪製茶園5代目



キーパーソン
岸田いずみさん
南山城村役場産業観光課

謝 辞

2020年にプログラム作りのための研究会を計3回行いました。京都府内で活躍する以下の方にご参加いただきました。ありがとうございました。

- 自治体職員3名 (亀岡市、精華町、伊根町)
- NPOなど団体職員5名
- ポートランド州立大学公共サービス実践センター (CPS) 3名
- 大学教員 (長崎県立大学地域創造学部・CPSフェロー)



今回のプログラム中の2日間、そして何年も前からプログラムづくりについて関わっていただきました皆様、ありがとうございました。



NEWS LETTER 28

2022.12

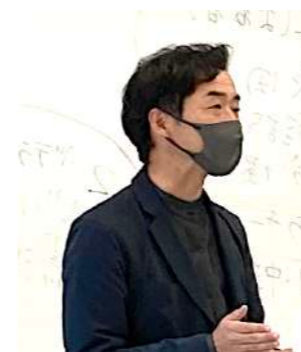


【主催】人材育成プログラム「2022場づくりLabo in 南山城村」をご報告します。

1

場づくりLaboとは？

自治体職員、地域づくり支援者、実践者等を対象に、住民主体のまちづくりの現場を体感してもらい、ディスカッションを通じて地域づくりを問い直すプログラムです。



わがまちの未来を創造したいという人たちのために、
大学は何ができるのか。

全体モデレーター
川勝健志
公共政策学部教授

まちづくりに関心はあるが、何から始めればよいのかわからない。そんな悩みを抱えながらも、わがまちの未来を創造したいという人たちのために、大学は何ができるのか。大学は地域との接点を増やし、人と人を結び、知を共有して地域社会が直面する様々な課題の解決に貢献できる存在になるべきではないか。私たちのセンターがキャンパスを飛び出して地域に赴き、参加者には五感をフルに使い、主体的に学んでもらう。そんな生きた素材を提供できないか。私たちが模索し続けて辿り着いた1つの答えが、「場づくりLabo」です。まちづくりに不可欠な他者との対話を次世代につながる新しい価値の創造につなげるためには、多様な人々が集まり、意見を交わす場をつくる必要があると考えたからです。

今回、学びのフィールドとしてお世話になった南山城村でキーパーソンとして活躍されておられる方々は、まちづくりのプロセスで絶えず苦難に直面しつつも、常に適度な遊び心を忘れず、実に楽しそうに取り組んでおられることが、とても印象的でした。その際、彼らが繰り返し強調していたことは、“自分たちの物差しで測る”ということでした。しかし、自分たちの物差しで測るには、まずその物差しを持たなければなりません。そのためには地域の個性を再発見し、それをほんの少しでも味付けしてアップデートすること、またそのプロセスでステークホルダーとの対話を粘り強く重ねてビジョンを共有することが、まちづくりの第一歩になることを、私自身も改めて学ばせて頂きました。

プログラム

近年、地域づくりの文脈で、場づくりに関心が高まっています。全国各地で、地域内外の人や組織のつながりを再構築し、人と組織の相互作用によって、地域らしさを再発見しながら新しい活動や価値を生み出し、課題解決につながるような活動が生まれています。センターでは、国内外の研究者やまちづくり実践者と連携して、2020年度から住民主体のまちづくり人材の育成のプログラムづくりを進めています。

対象	自治体職員、NPOや民間団体等の職員、地域づくりに取り組む実践者、支援者、学生等
募集	15名程度 (参加料無料・実費は負担)
こんな人におすすめ	<ul style="list-style-type: none"> ・地域づくり一般に興味があるひと ・南山城村での取り組みについて知りたいひと ・より多くの人と仲間づくりをしたいと思っているひと ・住民主体、住民自治という概念に興味があるひと
提供プログラム	<ul style="list-style-type: none"> 1 オンライン事前学習 (目的：参加者交流・問題意識の共有) 2 現地フィールドワーク (1泊2日合宿型プログラム) <ul style="list-style-type: none"> ・グループワーク ・地域の方への聞き取り ・参加者・講師とのディスカッション ・地域のキーパーソンとの交流

2 プログラム

フィールド学習実施の2週間前にオンライン事前学習を行いました。そして現地フィールド学習は、参加者、地域のキーパーソン、モデレーター、スタッフとともに、1泊2日の合宿型プログラムです。

10/15 オンライン事前学習

フィールドワークに先立ち、オンラインで事前学習を行いました。まず、参加者同士がペアになり、参加者のバックグラウンドや興味関心を共有し、お互いを知るアイスブレイクを行い緊張を解してからスタートしました。後半は、川勝センター長から、プログラムのテーマと目標について、学びの心得について話題提供を行いました。



10/29 プログラム1日目 会場：旧・田山小学校

午前①話題提供「地域商社としての道の駅の立ち上げと村づくり」

スピーカー：森本健次さん（株）南山城代表取締役

村づくりをけん引してきた森本さんから、村づくりのビジョンとして地域経営の軸（何が地域の課題なのか？どんな手法を使うのか？なぜやらなければならないのか？）について語っていただき、参加者との質疑応答を行いました。

午後②

田山地区の唯一の商店である東山商店を訪問し、売れ筋の商品をお聞きしました。近隣の住民の方から自宅前に展示するイルミネーションも点灯していただき、製作秘話もお聞きするといううれしいハプニングもありました。

午後③話題提供「南山城村の移住定住の取り組み」

スピーカー：岸田いづみさん（南山城村産業観光課 課長補佐）

午後④中窪製茶園と和紅茶の工場見学

スピーカー：中窪良太郎さん（中窪製茶園）

フィールドワーク後は、田山小学校に戻り、3つのグループに分かれて参加者同士で「楽しかったこと」と「気になったこと」話し合い、全体で共有しました。最後に、モデレーターである上杉先生（文学部）から「暮らしや食文化など地域に固有の価値を再発見し自分たちのものさしをつかっていく重要性」について、コメントがありました。



10/30 プログラム2日目 会場：道の駅の芝生広場・やまなみホール

午前⑤ 道の駅お茶の京都みなみやましろ村

スピーカー：兜岩知也さん（カメラマン・むらびとらべる代表）

ロゴや空間デザインなど道の駅のコミュニケーションのデザインを担ってきた兜岩さんから、道の駅の立ち上げ前から、住民とのワークショップを繰り返し、コンセプトをつくってきたプロセスを語っていただきました。

最後は、いままでのプログラムにおいて参加者が「自分の中でクリアになったこと」「まだクリアになっていないこと」についてグループディスカッションを行い、全体で共有しました。最後に、全体モデレーターである川勝センター長から総括コメントがありました。

3 プログラム参加者の感想

プログラムで感じたこと、考えたことなどの感想と、プログラム終了後のアンケートから皆様の感想をお届けします。



参加者
駒寄忠大
公共政策学部准教授

南山城村をフィールドに、人が集い、ともに食事し、議論する。そして、人がつながり、共鳴し、互いに高め合う。

我々にはこうした場が必要で、多くの課題を解決するきっかけになるのではと希望を感じることができました。また、こうした機会を提供しているKIRPという存在の大切さを再認識しましたし、引き続きよりよいかたちでプログラムを提供していけるよう私自身何が出来るのかを考える契機にもなりました。

最後に、今回、南山城村でお世話になった方々から、目に見えない色々なものをいただきました。それはいずれ皆さんによるこんでいただけのかたちで何かしらお返しができればと思います。



参加者
今堀誠弥
京田辺市職員・KIRP研究

様々な参加者と交流

本プログラムに参加した感想をお伝えします！

- 1.住民参加のまちづくりを学べた
住民参加のまちづくりについて現場のお話を伺い、意見交換ができ、今後自治体職員に求められる考え方など学ぶことができた。
 - 2.様々な参加者と交流できた！
様々な方のご参加があり、夕食会など参加者と交流する機会がたくさんあり、自治体などの様々なお話を聞くことができた。
 - 3.南山城村の魅力が堪能できた！
茶畑見学や山の幸を味わうことができ、南山城村の魅力をしっかりと堪能することができた。
- 以上楽しみながらも学びの多い有意義な事業でした！



参加者
前川由衣
精華町職員・KIRP研究員

「自分ごと」として捉えるために

今回は、参加者としても学ばせていただき、まちづくりに携わる方が、どのような思いで取り組まれているのかを肌で感じることができました。

印象深いのは、森本さんの最初のお話で「利と害がある。利だけを得ることはできない。」とおっしゃっていたことです。まちづくりは、様々な人や組織との協力と理解が不可欠であり、各々の利害の折り合いをつけていくことの大変さ、というのが伝わってきました。一方で、その「面倒な」過程を踏むことができるのは、地域のことを「自分ごと」として捉えているからこそなんだということにも気づかされました。

地域のことを「自分ごと」として捉えるために、行政は何ができるのか、ということを探求していきたいです。

その他の参加者の声

■今回のプログラムの良かった点

- ・地元の方々と、直接、お話しができたこと
- ・机で学んだ理論などを実感に落とし込めたこと
- ・まちづくりの多様なキーパーソンと凝縮された時間を過ごせたこと
- ・食事の時間、車移動、懇親会、夜の座談会、グループワークなど、交流できる機会が豊富にあったこと
- ・現場の方の声を聞き、良い面、悪い面も知れたこと、実際の熱意を感じられたこと、雰囲気良かったこと。座学だけでなく、現地を見られたこと
- ・世に出ている本や大学の講義では語られていない部分まで、お聞きすることができたこと

■来年度以降、当プログラムに再度参加をご希望、プログラムへの期待など

- ・今回のように現場に多く赴けて実際に現場感覚を体感できるプログラム
- ・参加したい、本当にたくさんの方に参加いただきたい研修プログラムなので、他の職員も紹介したい
- ・今回のようなフィールドワークとディスカッションの場
- ・別のフィールドなら参加希望、また周りの興味ある方に紹介したい
- ・プログラム内容は今回と同様多くの地域のキーパーソンに出会える
- ・日が合えばぜひ参加したい、今回のプログラム内容でも十分
- ・京都市内や新興住宅地での地域づくりに関すること

■今回のプログラムで得られた学び

- ・普段関われない方々と関われ新たな視点や感覚を知れたこと
- ・「誇りの回復と復権」が地元愛に基づく地域循環経済の基盤となること
- ・森本さん、兜岩さんの苦労したエピソード（コンセプトとデザイン、南山城村音頭で「つちのうぶ」を見つけたくだり、村人とのワークショップを積み重ねた）
- ・「時間を越えた目を持つ→ビジョンとコンセプト」「共感を生む仕組みをデザイン」
- ・プログラム設計は調整、準備、フォローアップあってこそ、ということ
- ・「キーパーソン」に「ホーム」で出迎え、これ以上ない場のしつらえで、そこから先の学びは各々で持ち帰れたのも、プログラムの安定感があってため

